2010.6.10(木)
徳島新聞

子育て 健康&医療

はぐくみ支援セミナーから

子育て支援に携わる徳島県内のボランティアリーダーらが、子どもの健康や発達、医療について理解を深める「はぐくみ支援セミナー」（代表世話人・松岡優徳島市民病院副院長）が、徳島市内の県立総合福祉センターで開かれた。ひまわり保育園（徳島市）の阿部浩紀主任が「自然に生きる保育」、清家卓也徳島大学形成外科医師が「レーザー治療について」と題して講演した。

子どもが持つ力育てる

自然に生きる保育

阿部さん

「子どもの抱える問題は大人の問題」と話す阿部浩紀さん＝県立総合福祉センター

以前は、子どもは自然の中で子どもだけで群れになって遊ぶ「子どもの世界」をつくっていた。しかし今は、屋内で大人から与えられたもので個々に遊ぶ「大人の世界」になっている。こういう状況が子どもの発達を妨げている。ひまわり保育園では2005年から4年間、自然の中で保育を実践するよう内容を見直した。水や土、木、石、小動物、植物などの自然物で自由に遊べる環境にし、しつけや訓練は少なくした。

園庭に遊具があると、保育士が使い方などを指示したり、禁止したりしてしまうことが多くなり、子どもの活力を奪う。まず、子どもたちが自由に活動できるように遊具を減らした。

5歳の子どもに粘土を手渡すと、最初は水で溶かして遊んだが、次第にこねたり造形したりするようになった。泥団子を作った子は友達と数の多さを競い、自然に数の概念を獲得した。

川でつかまえたカメが同じ水槽に入れたザリガニを食べるのを見たときは驚いていたが、本来、ザリガニはカメの好物。自然では餌いが繰り広げられていることや、命の大切さを学んだ。木の小屋を造ったときは全員で協力して完成させ、社会性も身に付けた。

このほか▽体力が向上する▽病気の回復が早くなる▽けがをしても我慢する▽子ども同士の間でのトラブルが減り自分たちで解決する▽身の回りの整理を自分からするーといったことができるようになる変化がみられた。

自然の中での保育で豊かな感性を養うことができ、生きる意欲や子ども本来の力を育てることができた。人間関係を築くのが難しくキレやすいといった今の子どもが抱える問題は、子どもではなく大人の問題。大人が変われば子どもも変わる。家庭や地域社会を変える必要がある。

種類で異なる治療法に

レーザー治療

清家さん

「あざの種類によって治療方法が異なる」と話す清家卓也徳島大学形成外科医師＝県立総合福祉センター

あざは、生まれつきあるいは生後に生じる皮膚の色素細胞や毛細血管、そのほか皮膚の構成要素の異常で起きる。医学的には「母斑」と呼ぶ。色調によって赤あざ、青あざ、茶あざ、黒あざがあり、それぞれ治療方法が異なる。

赤あざの一種であるイチゴ状血管腫は、7歳くらいまでに自然に消えるが、早めにレーザー治療を行うが、ほとんどが再発するので治療は慎重に行う必要がある。

黒あざ（先天性色素性母斑）は、まず切除手術を考える。巨大なものや顔面のものはレーザーで治療する場合もあるが、効果は小さく、治療回数も多くなる。直径20ミリ以上の大きなものは悪性黒色腫を生じる可能性があり、注意が必要だ。

レーザー治療は外来通院で治療できることが多い。数回の照射が必要で、皮膚の炎症の鎮快を待つのと保険適用の観点から、次の照射まで3～6カ月あける。治療期間中は紫外線予防など照射部位のケアが大切。

レーザーは、あざを薄く小さくできるが、万能ではない。完全に消すことはできないので、積極的な治療をしない選択肢もある。悪性腫瘍やほかの合併症の可能性もあり、一度専門医の診察をお勧めする。

◇

次回は7月下午後6時半から県立総合福祉センター。テーマは「特別な支援が必要と思われる幼児への対応」（講師・鳥治伸徳島文理大教授）と、「斜視・弱視について」（同・四宮加容徳島大眼科医師）。参加費100円。誰でも参加できる。